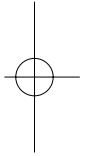
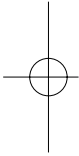
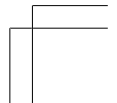
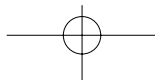
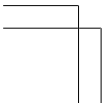


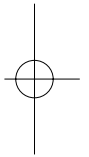
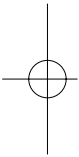
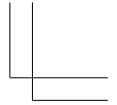
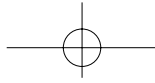
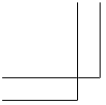
3

宵待ちフェスタ！

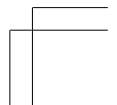
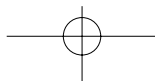
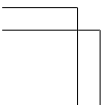


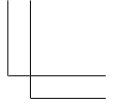
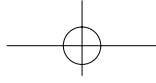
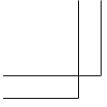
kifumido





本文：桐月
表紙：バハムーチョ

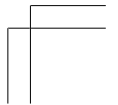
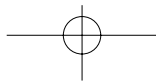
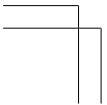
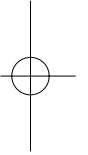
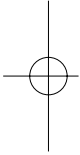




目次

宵待ちフエスタ！ …… 7

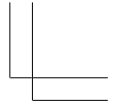
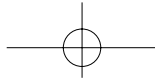
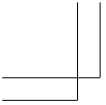
エピソード …… 7
6



この作品はあつぶりけ製作である「黄昏のシンセミア」の設定、世界観、キャラクターを使用した二次創作小説です。

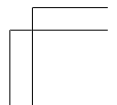
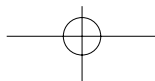
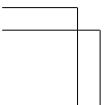
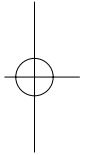
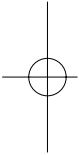
原作の企画、設定、担当シナリオは同じく桐月ですが、あくまでアンオフィシャルの同人誌であり、今後の展開において内容に齟齬が生じる可能性もあります。

あくまで本作は本編のIFであることを明記いたします。



7

宵待ちフェスタ！



宵待ちフェスタ！ プロローグ

夏の暑さも落ち着き、教室に響くエアコンの音も消えた。

授業中に響くのはカツカツと黒板をうつちョークの音と、教科書を読み上げる教師の声。

合間合間に、ノートに書き連ねる漣のようなペンの音が交じり合う。

彼女達が席を並べる清宮女子学園は校名通りの清廉な女子を教育し、卒業するまでの3年間で勉学のみならず、行儀作法も取めた淑女を輩出する——というのは昔の話。

現代文化に染まった年頃の女子の教育は全国の教師に漏れずこの学園でも悩みの種である。

それでも近隣から学園生は素行が良いと評判なのは昔とった杵柄だろう。

あくまでそれだけの話なのだが、今の彼女達はわき目も振らず一心に授業に取り組んでいた。

常日頃、授業中にもメモを回し小さくおしゃべりをするのはあたり前の生徒ですら、他に倣い一心に黒板をおっている。

その最中、彼女達の目が時おり壁に掛けられた時計を、それこそ黒板よりも熱心に見ていたのは仕方ないだろう。

静かな教室に、カチコチと時計の音が混じる。

一秒ごとに時を刻み、六十を数えて長い針がカチリと一つ隣にずれる。

……5。

それを見て、皆神さくやは頭の中で数字を数えた。

後五分。

それで区切りになる。

彼女は他の生徒よりも真面目な生徒として扱われ、それは大体において事実であったが、それでもカウントを取る事はやめられなかった。

……4、3、2……。

「それではこの問題を……」

……1……!

「皆神さくやさん」

「……!」

後一つという時に名前を呼ばれた。

カウンタを取るのに注視していたため、とっさに起立もできず返事をすることも出来ず、ガタガタと椅子を引く音が教室に響く。

「あ、申し訳ありません、ええと……」

慌てて答えようとした所をやんわりと押し留められる。

「あなた達、目が時計に釘付けですよ」

初老の教師がクスクスと笑う。

「さくやさんまでこうなのだから、無理もないことかしら」

「申し訳ありません……」

小さくなつて俯くさくやにあわせてチャイムが鳴る。

待ち望んでいたカウンターの終わりに視線を集めていたのは、時計ではなく赤く縮こまるさくやだった。

「それでは今日はここまで。皆さん、学園祭頑張ってくださいね」

穏やかな口調で終了を告げるが、その口元に浮かれた生徒にしてやっつたと言わんばかりの、年齢不相应の悪戯心が浮かんだ笑みを、さくやは見逃さなかった。

10月の第二週の金曜日。

教室に張られたカレンダーの日曜日に赤いマークがついている。

清宮女子学園で開催される秋の学園祭。

3年生として受験を迎えるさくや達にとって、学園で行う最後の行事だった。

「さくや大変だったね〜」

授業中と一変し、教室は途端に慌しさを増す。

3年の秋になり部活動も引退した生徒が直面するのは来年春の受験だ。

残り数ヶ月という期間を持って余す者も多く、勉強に励む者、部活動で控えていた遊びに使う者、それから日々を怠惰に過ごす者で分かれていた。

さくやに声を掛けたクラスメートは後者に属しており、特に急ぐ調子もなく気安く声を掛けた。

「……い、え……」

完全によそ見をしていたと、さくやは内心後悔する。

本日の授業はこれで終わりだ。翌日から文化祭の準備期間を挟んで、週末にはお祭りが行われる。

自分では普通に過ごしていたつもりが予想以上に入れ込んでいたのだと思い知らされて、さくや本人が驚いていた。

最上級生だからと言って、年頃の少女全員が祭りの前に真面目に授業を受けるなどという殊勝な態度を徹底する訳がない。

授業態度の悪い者は祭りに不参加で補習というペナルティがあり、その重圧から解放さ

れた事も今の浮ついた空気に拍車を掛けていた。

「それで学園祭なんだけど、さくやの家の人って今年は来るの？」

「はい。今年は家族と友人……が来ると思います。昨年は……ちよつと……」

「ふーん、そっかあ」

「薬師さんは、確か昨年はお姉さんが来られてましたよね」

さくやの言葉に薬師清香は考え込む。

「そうだねー、今年もおねえちゃんは今も来ると思う」

「そうですか」

それぞれの家庭には、それぞれの事情があるものだ。さくやは一人頷く。

目の前のクラスメート——薬師清香やくしきよかは入学して最初に出来た友人だった。

出席簿順に座る教室で二人の席は近い。

無口なさくやに臆面無く話しかけ、それから3年近くすぎても変わらず接してくれている。

一つ難点をあげるなら、宿題を忘れるたびに、皆神大明神などといわれて手を合わせら

れる事だろう。

「じゃあ、今年は例のお兄さんも来るんだ」

「……え」

その一言に我にかえる。

さくやの兄——皆神孝介もやって来る。

それは至極当然の事であり、さくや自身もそのつもりでいた。

「え、ええ……まあ。特に用事が無ければ来るのではないでしょうか……」

「そうかそうか。昨年来なかつたから今回は楽しみなな」

「……う」

「やつぱり似てる？ 兄妹ってどれだけ似るんだろう？」

さくやに顔を近づける清香は、好奇心に目を輝かせている。さくやは圧力に押されるように椅子に斜めに沈み込んだ。

「に、似てるかどうかは分かりませんが……似てないと言われた事はありません……」

「じゃあ似てるって事なんだ。さくや似の男の人だとかなりイケてるっぽよいよね」

何気ない一言に、一瞬教室の雑音が止まった——気がした。

そして、言った張本人は気付いた様子もなく続ける。

「あつ！ そうそうつ！ 写真前にちらつと見せてもらってたけど、確かにそんな雰囲気だったかな。ねえねえ、また見せてよ」

「……いい、嫌です」

「ええええ。どうして〜つ」

悲鳴をあげるが、さくやには知ったことではない。

それより、興味津々に聞き耳を立てるクラスメート達から面倒な事になる前に離れるのが急務だった。

「私、用事がありますので」

鞆を手に小走りに教室を出る。

「あーつ、ちよつとおつ」

廊下に出たが、予想に反して清香は追いかけてこなかった。

ただしかし、背後の教室から聞こえる雑談に不穏な気配が漂っている。

「ねえねえ、やつちゃん。皆神さんって、お兄さんがいるの？」

「え〜？ 私はカレシって聞いたけど」

「どんな人だったの？」

「見た事ある？ 似てる？」

……背後の教室から聞こえてきた音声は、勤めて聞き流すようにした。

校舎を出たさくやは、昇降口にクラスメートの姿がない事を見て大きく息をついた。

「どうしてこう……」

噂が好きなのだろうと、つくづく思う。

いつもの癖で携帯を取り出す。

慣れた手つきで兄に文面を打つ。

「……………」

——クラスメートの女の子が兄さんに興味深々です。

送信ボタンを押そうとした手を押し止め、クリアボタンを押して書き直した。

——勘違いは一部解けましたが、まだ勘違いされています。

「意味不明……ですよね……」

こんな物を送ってどうしようと言うんだろうか。

オフのボタンをおして、メールを下書きのフォルダに入れた。

文面は抹消していないが、どうせ後で書き直すのだからそれ自体はどうでもいい事だ。昔は人付き合いの薄いさくやが頻繁に携帯メールをやり取りする異性という事で、兄の孝介が恋人だと勘違いされていた。

時間と共に飽きたのか、それとも兄というさくやの訴えが信用されたのか、最近はある言われなくなっている。

……が、しかし、今ではそれは勘違いだと訂正しづらい状況になってしまっていた。

「……はあ」

再び小さくため息をついた。

皆神さくやには慕っている異性がいる。相手もさくやの気持ちを受け入れ、二人は結ばれてお互いの気持ちも深く結びついている。

舞い上がるでもなく、さくやはそう認識し受け入れてはいるものの余人に大っぴらに話せる物ではなく……それが今のため息に繋がっていた。

「どうしよう」

友人に兄を紹介するのも構わない。

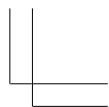
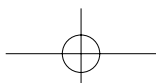
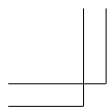
恋人を紹介するのも、特に問題はない。

だがしかし、その両者が同一だった時は、一体どのように言えばいいのだろうか？
それが、好奇の視線に晒される事で浮かび上がった、さくやの悩みだった。

「週末、兄さんが来たら……」

その時の事を想像し、かぶりをふった。

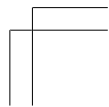
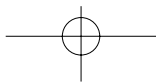
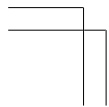
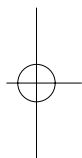
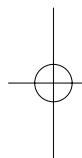
調子のいい所がある兄は、余計な事を言わないだろうか。その疑問の答えは、さくや自身が一番よく分かっていた。



「……兄さんのことだから……はあ……いっそのこと黙ってようかしら」

寮の自室に向けて、とぼとぼと歩き出す。

そんな事が出来たら苦労しないと、さくや本人が良くわかっていた。
授業中も上の空になるほど、週末に兄と会うのを楽しみにしていたのだから。



さくやがその気持ちを自覚したのがいつだったか、もう記憶も定かではなかった。ただ、物心ついた頃にはあたり前のように目の前の背中を追っていた。小さな視線の更には先にあるのは、さくやより少しだけ高い小さな背中。背後からは大好きな両親の声が聞こえてくる。

『さくやは本当に孝介の事が好きなのね』

柔らかく暖かい声は母親のもの。

高い位置にある顔は陽射しで影になって思い出せない。ただ、今のさくやと同じ容姿をしている事は知識で知っていた。

この想いは果たしてどこからきたのか。

幼い頃は純粹な好意で良かった。

家族と兄という一人の男性に垣根などなく、両者は同一で良かった。

幼い頃に御奈神村で過ごした時も、母を亡くした時も、東京に引っ越した時も、常に

家族が側にいてくれた。

だからだろうか。

いつの頃からか、さくやは一人に憧れるようになっていた。

母を亡くし、壊れそうな自分を助けてくれた兄。

最愛の人を亡くしたのに、子供たちに無償の愛を注いでくれた父。

兄への思いを父に悟られたら悲しませると気に病み、大好きだからこそ兄から離れなくてはいけないと、遠く離れた全寮制の学園へ進学を希望した。

それが今から3年前の事。

そして現在——さくやを取り巻く状況は大きく変わっていた。

「おかえ、り〜。速かつ、たね」

「……たたいま」

少し時間を潰してから部屋に戻ると、出迎えたのは妙な抑揚のついた挨拶だった。

ベッドの方からギシギシと音がする。

それにあわせ、若い女子の吐息が混じる。

「さくつち、ん、今日は買い物、いかな、かったの？」

「……………ええ」

さくやのそっけない返事も気にした様子もなく、ベッドの上でギシギシと音を立てる。入学してから寮の部屋を共にしたルームメイトも、さくやの態度にも解さず上下運動を続けていた。

「それでさくや——」

「…………とりあえず、喋るか休むかどちらかにしてはいかがでしょう」

ため息混じりにベッドのふちで踏み台昇降運動をするルームメイトに言った。

「いやー。体動かさないとすぐ肉ついちゃって」

傍らにあったタオルを手に、洗面所に消える。

その間にさくやは窓を開け運動の熱が籠る室内に風を入れていた。

「さくつちもやったら？　結構いいよ」

戻ってきたルームメイトは言いながら自分の脇腹を叩いた。

「効果あるんですか？」

「手軽に出来るくせにけっこーいいよ。…………なに、さくつちお肉気になるお年頃？」

「……南さんが言ったんじゃないですか」
「あはは、そうだった」

さくやのルームメイト——仁科南にしなみなみはあっけらかんと笑った。

夏の大会までバスケット部に所属しており、体を動かさないと落ち着かない体育会系の少女だが、小柄な体に黒いボブカットヘアは人形のようにも見える。

女子にしては長身のさくやがインドアなのと反対に、外で体を動かすのを得意にしている。

「反対要素が多いからこそ、ルームメイトとして暮らせてきたのだろうと、さくやは思っていた。」

「明日は学園祭準備だよ。さくつちの所は何やるんだっけ？」

「うちは、また喫茶店です」

「あれ？ 昨年もそうだったっけ？ なんか研究発表みたいなしてなかったっけ？」

「いえ喫茶店は一年の頃に。昨年は教師の年収と効率についての研究発表でした」

「ああ、そうだったそうだった。さくつち逃亡事件があったんだった」

「……逃げてませんから。皆さんの勘違いです」

無然とした声で告げる。

さくやが一年の時、仁科南と同じクラスだった。

そこで開かれたのは喫茶店。ただし、特殊な衣装に身を包んだものだ。

最初は制服にエプロンという、ただの催しだったのだが、当時のクラスメートに衣装を扱っているお店の娘が居た事で、話が横道にそれてしまった。

「本当に、どうしてあんなったのやら……」

ため息と共にはきだす。

きっかけはよく覚えていないが、確か流行の話だったように思う。

「いいんじゃないかなー。さくつちのメイド服似合ってたよ」

「……本当にどうしてあんなったのやら」

多分、数日前にやっていたらしい東京のメイド喫茶特集のテレビ番組が全ての原因だろう。

さくやは御奈神村から引越した後、入学直前まで東京都に住んでいた。

入学式が終わった後、見知らぬクラスメート達に対してそう自己紹介をしていた。

東京の紹介番組と、東京からきたクラスメート。

この二つを面白おかしくくつつけるのに、そう時間は掛からなかった。

「もう二度と着ません」

「まあまあ、写真ならここにがあるし」

「ちよつと!」

携帯を取ろうと手を伸ばす。後数センチという所で、手が空を切った。

素早く身をかわされ、勢い余ったさくやは頭からベッドに倒れこんでいた。

「そのフットワークじゃ、わたしからカットは無理かな」

「ひどいですよ」

テレビでみたメイド喫茶の話になり、さくやが東京に居た頃に行った事があるのかと問われ——その時に、先の娘が言った一言が発端だった。

——うち、メイド服の在庫あるよ？

「本当にまったく……」

当時は兄——孝介を始め、父まで学園祭にやってきていた。

二人を案内しようと思っていたのだが、メイド服を着る着ないの間答をしている間にさくやの調理当番になり、その後メイド服のまま二人を探したのだが、トイレに行っていた兄とは擦れ違ってしまった。

女子校のため、男性用トイレは職員用を流用する形になっており、タイミングの悪さを呪った。

それと同時に恥ずかしい姿を見られなかった安堵と、一部囁かれていた『さくやの兄』に興味津々なクラスメートを押し留めているうちに、まともに話も出来ないまま、二人の帰る時間になってしまった。

本人達は華やかな女子校の学園祭を心の底から楽しんだようなのだが……さくやにとつては、あまり触れられたくない歴史の一つになっている。

「今年はまだあんな事はありません」

「そうなの？」

「ええ、よくよく考えれば、たかがフリルのついた衣装にすぎません。恥ずかしがる理由なんてないですから」

「……今、思いっきり写真消そうとしてきたよね」

「不意をつかれて慌てただけです。鋼の心で自制をすれば、大した事じゃないと心の底から理解が出来ます」

「……そこまで押しとどめないとダメなんだ。というかそれ、自分に言い聞かせてるだけなんじゃ……」

「今年を着たい人のみになりましたから」

「そうなんだ。それは残念だなあ」

「残念じゃありません！……なんだか、兄さんと会話してるみたいです」

「へえー」

「あ」

しまった、と思った時には遅かった。

「さくちちって、お兄さんとどんな会話してるの？いつものメールの人でしょ？今年
は来るの？」

「う——っ」

思わず仰け反るさくやに、南は距離を詰めてくる。

カットが出来なかったのと同様にマークを外すのも難しそうだった。

結局、東京に居た頃の話をして、夕食前に何とか解放された。

夕食が終わった後、さくやは寮の庭に出ていた。

携帯電話を使うのに同居人に配慮したからだが、あまり聞かれたくない内容だったものがある。

電話口の相手に今日の事を愚痴交じりに語る。

さくやにとつて気心の知れた相手だ。向こうもそれを気にした様子もなく、楽しげな返事がくる。

「楽しくないですよ。ほんと困ってしまっんです」

電話口からは幼馴染の笑い声でした。

『こーすけに言っちゃえば？ 学園でモテモテですよって』

「嫌です。兄さん調子に乗ります。絶対です」

『そんなこと無いと思うけどなあ。さくやちゃん一筋じゃないの？』

「……………そんなこと言われても、肯定も否定もできません」

『あはは、それはそうだ』

春日いろはの快活な笑い声を聞いてがっくりと肩を落とす。

御奈神村に居た頃のさくやと孝介の幼馴染で、春日神社の跡継ぎのいろはは、二人にとって一番の理解者になっている。

それは年が近くお互いをよく知っているというだけではなく、さくやと孝介の関係を含めた上の話だ。

『でもふつーに、これがうちの兄さんです、くらいで押し通しちゃえばいいんじゃないの？ きつと、さくやちゃんの反応が面白いから、それだけツツコミされるんだよ』

「そうなんでしょうか……ですが、自分で余計な事を言ってしまうのか心配で……」

『まあ、あまり迂闊な事を言うともまずいのは確かだよね』

「はい……」

さくやのジレンマがそれだ。

友人に兄を紹介するのも、恋人を紹介するのも構わない。

だがしかし、この場合それらは同一なのだ。

世間的に忌避される関係であり、そのために昨年兄との接触を断っていた。いくら、いろはのように変わらなず接してくれる友人がいるとしても、全員にそれを求める事は出来ない。

いろはにしても、以前兄に、二人の関係について否定的に語っていた。

彼女にしてもそうなのだから、やはり自分と兄の関係は迂闊にもらす事は出来ない。しかし、口下手な自分がどうやって彼女達の好奇心をそらせばいいのだろう……？

さくやの葛藤が伝わったのか、電話越しにいろはの苦笑が聞こえた。

『ほら、でも昔っから言うじゃない？ 案ずるより産むがやすしって。だから、あんまり気にしない方がいいよ』

「そうですね……ありがとうございます。少し考えすぎていたようです」

『それで話を戻すと学園祭は日曜日だよね？』

「あ、はい。そうです。すみませんすっかり横道にそれてしまってます」

『いいっていいって。さくやちゃんとおしやべりするの久しぶりだし、友達の話ってあんまり聞いた事がないしね』

「そう言って頂けると……それで当日の時間なのですが……」

朝の10時開始で夕方4時で終わる事。

その後は来場者は帰宅となり、残った生徒で片付けを行ってキャンプファイヤーで終了となる事などを告げる。

『ふむふむ……っと。おっけー、わかった。もし行けなかったらごめんね。あ、だけど、あたしか朱音さんのどちらかは行くから』

「はい、わかりました。それではまた週末に」

電話を切り一息つく。

それから次の番号を呼び出した。

「こんばんは。さくやですが、皐月さん、今だいじょうぶでしょうか？ 週末の学園祭の事なんです……」

叔母の岩永皐月にも同様の連絡をして、従姉妹の翔子に代わってもらう。

その後は挨拶と近況報告をして、週末の約束をした。

就寝の前、さくやは最後の相手にメールを送った。

書いた文面は僅か数行。

学園祭の日時の確認と自分の教室の位置。

それから父によりしくという事務的なもの。

同時送信した父への文面も似たようなものだが、まだそちらの方が文章が凝っている。

——何はともあれ、学園祭を乗り切らなくてはならない。

眠りにつく間際まで、さくやは当日の事をシミュレートしていた。

友人になんと言って紹介するかという物だったはずのそれが、いつしか兄と共に学園を
散策する光景になっていたのは仕方がない事だった。

借りてきた本のページをめくる時は気をつかう。

長い年月が経過して、素材が劣化してきた和綴じの本は、乱暴に扱うとすぐに破ける。手の油も劣化の原因になるため、うっかり触らないように注意しなくてはいけない。ピンセットで摘んでめくり、上から少しずつ読み取っていく。

「え〜〜と……」

墨で書かれた文書は達筆というより、ただの癖字だ。

もはや解読に近いノリで机に広げたノートに清書していく。

「つたく、自分でやってくれよなあ……」

書かれているのは、戦国時代から江戸時代頃の天女についての覚書きだ。

いわゆる古書だが世に出ているものじゃない。それに中身はかなり強い主観が入っている上に、所々であれが無いこれが無いと愚痴がはいっているから資料としては使えない。当時の創作物の一つとして片付けられてしまうだろう。

ただ、これが天女に関するどんな一級資料よりも正確な本物である事は知っている。なんといつても、これを書いた本人から預かってきたのだから。

「銀子さんもなあ……」

御奈神村には一人の女性が住んでいる。

銀髪赤眼の日本人離れした容姿を持つ彼女は、ごく自然に村に溶け込むように、ひっそりと暮らし続けていた。

銀子さんというその人は、御奈神村が持つ神秘の一部であり、俺たちの家を遠く廻り続ければ血の繋がりにもいたる人だ。

夏休みに遭遇した事件の後、御奈神村の天女について調べていた事を銀子さんに話した時に持ってきてくれたのがこの本だった。

『多分これが一番昔だと思うんだけど、なーんかぼろっちなっちゃって……えへへ。ついでに清書しといてくれると嬉しいな』とは本人の弁だが、なんでも大昔にこっちの世界について、自分の世界と比較しながら書いたものらしい。

興味があつたので借りてきたが、たまに不便さを訴える愚痴がメインになっている部分

があり、本人を知ってるだけに生々しかった。

「ん……？」

不意にベッドの方から音が聞こえた。

投げっぱなしにしていた携帯が振動し、メールの着信を伝える。

俺こと皆神孝介にメールを送る人間は、実はあまり多くない。

そもそも、俺自身が無精者なのだからメールのやり取りが弾まない。

その中でも数少ない例外と言っているのが、今メールを送ってきた我が妹だった。

「なんだこりゃ？」

開いていた本を閉じ、代わりに携帯を開く。

学園祭の案内のメールに混じって、妙な文面が混じっていた。

『件名 学園祭の件』

日曜日の朝10時から夕方5時まで。
私の教室は校舎の3階です』

ここまではただの事務連絡だ。

しかし問題はその後。えらく改行した後に意味深な文章があった。

『クラスメートの女の子が兄さんに興味深々で』

更に行が空けられて、文章が続いている。

『まだ勘違いされています』

「どういこうしちゃ」

もう一年以上だが、さくやは教室で勘違いをされていると言っていた事があった。

それは俺がさくやの恋人だという物で、今となっては勘違いでも何でもなくなってしまうのだが……。

いや、それを知ってるのは俺とさくやと、それから身近な人たちだけだ。

それでもこのようなメールを送ってくるぐらいだ。さくやの方で詮索されるような事態になってるのかもしれない。

「……だとすると……」

まいった。

もしかしたら俺とやり取りしてるメールを見られたのだろうか。

「最近はデートがどうなんて話もしてるしなあ……しっかし、どうする？」

内容が内容だけに、迂闊に人に話せない。

親父には……。

「……………」

ダメだ。絶対にダメだ！

思わず頬のあたりを指でかく。

さすがに今は落ち着いているが、俺とさくやの事を話した時に、かなり良いのを貰って

いた。

……親父相手に妹と付き合ってます、なんて話をしたんだから当然かもしれないが、ともかく妹の学園は妙にお堅い所のある女子学園だ。

俺との関係を詮索されるのはとてもまずい。

さくやは一見して真面目で隙が無いように見えるが、やや天然入ってるので抜けてる所もかなり多い。

会話の端々やふとした事から疑われる可能性も……。

「……ありそうだ……」

それはまずい。とにかくまずい。

とはいえ緊急を要する文面ではなさそうだから、勝負は週末なのだろう。

疑われているだけなら、俺から変にリアクションするのは避けたい。

かといって、妹一人に押し付けるのも可哀想だから……。

「……………」

さくやにメールを返す。

いざとなったら少々強引な手でも何とかなるように、味方は多い方がいいだろう。

『学園祭には銀子さんも連れていく』

あんまり使いたくない手ではあるが、銀子さんは他人の記憶の印象を薄れさせる事が出来る。

さくやが思い悩むくらいのものであれば、少々強引な手に出るのも考えておこう。

翌朝、起きた時には既にさくやからの返信メールが入っていた。
『よろしくお願ひします』

即座に銀子さんに電話を入れて日程を伝えた。

翌日、学園祭の準備のために、さくやは昼前から買い物に出かけていた。清宮女子学園の前から出ている通学バスにのり、駅を目指す。

僅か10分ほどゆられると駅前に辿りつく。大きく開発された駅ビルの周囲にはビルが立ち並び、郊外の森に近い学園とは雰囲気が一変する。

文化祭準備とはいえ学園行事の一環のため、女生徒達は学園指定のジャージを着ている。

さくやの班は喫茶店で使うお菓子の用意だった。

女の子らしい買い物で、飾りつけや内装の重い物を持たなくて良いのはありがたかったが、それだけに重要な仕事だ。

「どこ行くー？ ケーキは明日まで持たないよね？」

「家庭科室を借りる事なので、そちらで当日に作る形ですね。今日は日持ちする

物で数を揃えられる物を中心にして、出来るだけ普段みないような……」

話している最中に、さくやが勢いよく振り返る。

「……あれ？」

駅から出る人々を見渡し、目を凝らして遠くを見つめた。

「どうしたの？」

「あ、いえ。何でもありません。一瞬、見知った人がいたような気がして……」

「え、だれだれ？ やっぱり例のお兄さん」

「……違います。次それを言ったら、葉師さん一人で買い物してきてもらいますからね」

「ごめんってばーっ！」

「ダメです。今日は手を合わせても許しませんよ」

勘違いだったという事で話も終わり、駅前の大型スーパーに行く事にした。

離れる前に、もう一度駅前を振り返る。

やはりそこには、銀色の髪の女性など居なかった。

S

「あ、危なかったあ〜」

狭い路地の中で、隣の銀子さんが胸を押さえる。

「さくやちゃん、あんなに勘よかったっけ？ それとも妹アンテナで孝介くんを受信？」
「俺じゃなく、間違いない銀子さんが目立つからでしょう」

銀子さんに話した所、いたく乗り気になってしまい、何故だか特急を使って御奈神村に行く事になった。

親父は兄馬鹿だと呆れていたが、文句は俺じゃなくて銀子さんに言っただけ。

「明日には誠二君も来るんだし、そうしたら自由に動けないでしょ？ 今日様子見にいかなくちやダメだよ」

とは銀子さんの弁だが、どう考えても楽しんでやっている。

長らく御奈神村にまつわる天女の遺産にその身を縛られていた彼女だが、全てが解決した後には宣言通り『この世の中を楽しむ』つもりらしい。

……まあ、数百年も生きてきた人に掛ければ、俺なんかていのいい遊び道具だ。

「来る途中も何度もいいましたけど、こんな所まで妹の様子を見に来る方がアレな人じゃないですか……？」

「大丈夫大丈夫、御奈神村は近いからこんな所じゃ無いよ。ちよつと買い物に来ましたら偶然はったりで通るから」

「そうかなあ」

「いいからいいから。——あ、ほら、移動するみたいだよ」

銀子さんがノリノリで出て行くこうとする。

腕を掴んで慌てて止めた。

「ちよつとストップ！」

「——きゃ！……もう強引なんだから。もうちよつと一緒がいいの？」

「……いや、マジ笑えないんでそういうのやめてください」

そもそも銀子さんは根本的な所をわかっていないらしい。

「そうじゃなくて、銀子さんめちやくちや目立つんですよ。さくやくくらい知ってる人なら、数百メートル離れててもひと目でわかります」

「え〜。どこが〜？」

「……髪と着てる服が」

「ああ、そっか。じゃあどうしようかなあ……う〜ん」

「ちらっと見た限りですけど、友達と仲良さそうだしへたに手出ししないほうが――」

「あ、じゃあこうしよう」

「話聞いてねえ！」

いつの間にか手に青いプレートを持っている。

天女の羽衣と言われる異世界の道具だ。

プレートは細かい粒子のように砕け、風に乗って大気に溶け込む。

でも、起こった変化はそれだけだった。

「……？」

「ちよつとあの辺りまで行ってみて」

50メートルほど離れた、遠くの銀行の入り口を指差した。

「いいですけど……」

小走りですこまで行く。

銀子さんの方を振り返ると——僅か20秒くらいの中に、見事に居なくなっていた。
「……あれ？」

さつきまで居た所に戻る。

路地の入り口には誰も居らず、ゴミ箱の上で寝ている猫が見えた。

「こっちこっち」

横から銀子さんの声が聞こえ、腕が引かれる。

そこでようやく彼女の姿を確認する事が出来た。

「どう？ 見えた？」

「いや全然……ああそっか、光の屈折を変える機能ですか」

「そう。これならいけるでしょ」

「そりゃ光学迷彩なんていうSF機能なら、問題ないでしょうけど……」

「それじゃいつてみようかー！」

すっかり銀子さんの遊びになつてるのは、どこでツツコミを入れるか迷う所だった。

S

学園祭で出す物は、出来るだけ地元の名産がいい。そちらの方が、ただの喫茶店ではなく地元の特徴を出す事が出来て学園祭らしくなる。

打ち合わせの時にそんな話をしていたからか、さくや達が最初にやったのは、地元ではどのようなお菓子を扱っているかリストアップする事だった。

「このクリーム入りの饅頭が美味しくてね〜」

この手の情報に詳しいクラスメートの案内で、一つずつ見て回っていく。

美味しいと言われたお菓子の試食を試してみたが、確かに外は柔らかく、中のクリームが舌にとろけそうで美味しかった。

「……美味しいですが、どこかで食べた事があるような」

「あっはは、やっぱり？」

「ええと、どこだったかしら……あ、そうです。昔、父が御土産で買って来てくれたような……あれ？　ですが確か東北に行った時だったような？」

「日本全国にパチもんのあるお菓子だからね」
「どっちかかっていうと、こつちがそうだけど」
「なるほど」

そう言う物もあるのかと感心する。今度はコンビニのお菓子ではなくこれを買って食べようと思っただけだ。

「では、すみません。こちらを2箱いただけますか？」

店の前で大声でそんな話をしていたからか、レジを打つおばさんは苦笑いをしていた。

そんな調子であちこちの店を回る。

さくや自身、甘い物が好きなのだがそれを言う機会がこれまでに無く、積極的に食べて回る姿は普段の教室のさくやしか知らない同級生からは意外に見えたようだ。

「皆神さんって、けっこう明るい人なんだ」

悪意は無くとも意外そうに言われた言葉に、どう返していいのか詰まる。

「あ、ごめんごめん。悪い意味じゃなくて、なんか面白いな〜って」

「アンタ、それ余計ひどい」

「え、そうかなあ……うー。ごめんね？」

「いえ、かまいませんよ。兄にもよくそのような事を言われていますから」

「お兄さん？」

「はい。私は普通になっているのに、人の事を天然だとかコメディアン体質だとか、失礼な事ばかり言うんですよ。そんな事を言う兄さんの方が、よほど体を使って笑いをとりに来るんですけどね」

「へ。どんな風に？」

「……どんなと言われましても」

「いきなり変なことするの？」

「そのような事はありません。行動も真面目だと思えます」

「……………それって普通の人じゃない？」

「普通ですよね…………？」

さくやも一緒になって首を傾げる。

兄のおかしさは間近に見て貰わないと分からないだろう。

気がついたら会話が脱線している事が多いが、たまにいつ話題がすりかわったのか分か

らなくなる。

普通に話しているだけなのに、おかしな会話になっているのだから、知らない人には説明が難しいと痛感する。

「でも兄は普通なのに気がついたらおかしな事になっていて……私もたまたま困惑するんですよ」

「……………」

黙って聞いていた女子が、ぼつりと言った。

「それ、皆神さんが天然だからなんじゃ」

S

「……ふっ、くく、………っっ！」

的確な一言に思わず噴出しそうになり、必死に太ももをつねって笑いを嘯み殺した。さくや自身が説明しようとすればするほど、さくや自身のズレを周囲に証明する結果になっている。

我が妹ながら、あの天然っぷりはなかなか美味しい。

「~~~~~」

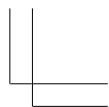
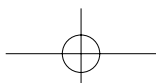
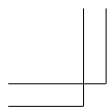
銀子さんのいる辺りからも、小さなうめき声が聞こえてくる。

ペチペチと地面から音がするのは、アスファルトを叩いているのだろう。

「ほんと、アイツは………思いつきり自爆してどうする……っ」

「さくやちゃんって、こうちゃんの事になると、いっしょけんめいだから………笑ったら、かわいそうだよ」

笑いすぎてるせいか、銀子さんの声にも張りが無い。



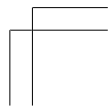
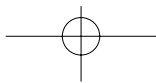
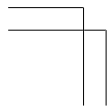
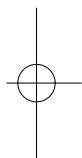
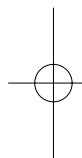
「最初はどうかなるかと思いましたが、これけっこう楽しいですね」
「でしよー？」

さくや達が次の場所に移動する。

肩が僅かに落とされているのは、自分の言葉が信じてもらえなくて落ち込んでいるのだらう。

だが妹よ。

あの説明じゃ誰がどう聞いても無理がある。



すっかり天然というレッテルを張られてしまい、さくやは気落ちしていた。

「兄さんのせいだ」

小さくもらした言葉にツツコミが入る。

「いや、お兄さん関係ないからっ」

「そうでしょうか……兄がもつと、皆さんにわかってもらえるような笑いをしてくれていればと強く思います……」

「お兄さん可哀想に」

「納得がいきません……」

翳りを落とした目元は悲しみを湛え、真面目な言葉は信頼を得られない悲しみを表現している。

「……ふっ」

だというのに、先ほどから口元にお菓子を運ぶ手が止まっていないのだから、悲しみも緊張感も何もない。

さくやの株価が真面目なクラスメートから面白い天然に急速な勢いで変動している様子を見て、孝介は笑い転げそうになつては、通りすがりの人に不審な眼で見られている。

それにさくやがまったく気付かないのが尾行している二人にとつてはおかしいのだが、さくやは気付く様子もなく、リストアップした店を上から回っていた。

「ねえ、ちょっといい？」

しかし、更に2件ほど回つた所で、先の実顔とは打つて変わった声で、女子の一人がみんなを呼んだ。

「なんだかさつきから、同じ人をよく見るんだけど」

「え、どんな人？」

「なんか男の人でお店の離れた所にいたり、ジュース買つてる所みたり……」

「……単に勘違いでは？」

「でも、お昼食べた時も同じお店に居たよ。それでついさつきも見かけたんだけど、偶然っていうのも……」

「どんな方でしょう？」

「背は少し高くて、太ってなくて、髪は黒くてちょっと癖があつて……」

「この近くって観光地なんかあったじゃない？ カメラや荷物なんか持っていない？」

「うん。何にもなし」

「そんな人、どこにでもいそうだけどなあ」

「でも何度も見かけてるんだよ。変な人だったら嫌じゃない？」

「顔は？」

「見てないよ。離れてるもん」

「……………」

今あげられた特徴に思い当る人物が居たが、先の事があったために、さくやは黙っていた。

そして、先ほど見た駅の銀髪を思い出す。

「少々失礼します」

携帯メールを打って送信。

手が空いていればすぐ返って来るはずの返事が、今日は時間が掛かっている。

「……………」

今度は一度だけ電話を掛けて、ワンコールで切った。

かすかに、聞きなれた着信音が流れたように思えたのは、さくやの勘違いではないだろう。

「いきましようか」

「え、でもそんな人がほんとに居たらどうするの？」

「その時は……」

見た人間が兄かどうか分からないが、予想通りの人物が近くにいるとしたら、何があっても危険とは無縁になるだろう。

「私が話をつけますよ」

きつぱりと力強く宣言するさくやに、少女達は感嘆の声をあげた。

§

「バレた」

携帯の着信はワンコールで途切れたが、間違はなくさくやに聞こえている。

それだけなら気付いてないと取れなくも無いが、メールの文面が『どこに居ますか？』は明らか誘い出しだ。

「けっこう楽しかったね」

迷彩を解いた銀子さんが気楽な調子で言っている。

「それで、さくやちゃんどうだった？ 安心した？」

「……安心して言われても、単にさくや尾行してただけじゃないですか」

「楽しそうではあったよね」

「それはまあ」

「こうちゃんと一緒に時のさくやちゃんって、すごく自然なんだけど、逆に言うとその以外の時ってあんまり想像できないんだ」

「そういうものですか……？」

「私から見てだけどね。でも、他にもそんな風に思ってる人もいるんじゃないかな」

「……………」

「どうだろうか。」

いろはも以前に似たような事を言っていたかもしれない。

俺とさくやの事について、いろはに忠告してみた事を言われて諭された時。それから、俺たちについて困惑を示しながらも変わらなず友達で居てくれると言っていた時。

俺とさくやについて、そんな事を言ってくれた。

しかし、俺と銀子さんが見た先にいるのは、友人たちと居る姿だ。

俺からすると楽しそうに見えたが、今のさくやは銀子さんからすると自然ではないという事なんだろうか？

銀子さんに言ってみると、少し困ったように笑った。

「それでもないんだけれど……うくん。こればかりは難しいかな。でも、私から見た今のさくやちゃんも楽しそうだったよ」

「いまいちよく分からないですけど」

「ま、いいからいいから。さて、それじゃちよつと行ってくるから、こうちゃんは駅前あたりで待っててね。先に帰っちゃ嫌だよ」

「え、行くってどこに……」

俺の質問には答えず、小走りでさくや達が歩いていった方向に行ってしまった。

「まさか」

今さら追いかけるわけにもいかない。

明日また会うのに、兄まで出ていくとややこしい事になる。

「……仕方ない。待つか」

少し取り残された気分であつた。

初めての街を一人で歩くのは、大学のサークルの関係もあつて珍しい事じゃない。

他所の地方に行く時に、教授のスケジュールと会わなくてずれて現地入りする時がある。

そんな場合も知らない所を一人で歩く事になる。

今回もそれと同じ。

後から銀子さんと合流して御奈神村まで帰る。
けど……。

「……はあ」

日が傾きつつある。

駅前のベンチに座り、買ってきたアイスを食っても気が晴れない。
やっぱり置いていかれたような感じがして、時間が進むのが遅かった。

「何をしてるんですか？」

聞きなれた涼しげな声は、少し呆れた色を帯びていた。

「恋人を待ちぼうける孤独な男ごっこをしてるんだ」

「じゃあ、それも終わりですね」

ベンチの隣にふわりと腰を下ろす。

鼻先を掠める長い髪から、いい匂いがした。

「で、なんで兄さん達がこんな所に？」

「……行つたる？ 銀子さん連れて行くって」

「……………それは、明日の事では？」

「俺もそのつもりだったんだけどなあ。こんなメール送られてきたから心配だったんだよ」
さくやからきた文面を開いてみせる。

「……………あ」

「な？」

「なんというか……………すみません。書き直した時の消し忘れです」

分かってみると単純は話。

ただ、兄の話題になると友人達の食いつきが良くなるのも本当の事らしい。

「という事は、明日行ったら……………」

「……………写真くらいは撮られるんじゃないでしょうか？」

「完全に珍獣扱いだな」

「きつと、同級生の兄妹ってそういうものですよ」

「否定はしない」

中学の頃に、俺の妹が入学してくるって事でさくやの事を見に行ったヤツがいた。

見た目だけは良いから、家に遊びに来るのかこつけてさくやを見に来たヤツまでい

る。

それと似たような物なのだろう。

そして、これと同じ話は当時のさくやの側でもあったはずだ。

「ですが……」

「うん？」

「兄さんが不愉快に思うなら、明日来なくても大丈夫です」

「……………おい」

「わっ」

頭に手を置いた。

そのままぐしゃぐしゃにかき回す。

「ちよ、ちよっと。いきなり何をするんですかっ」

慌てて手櫛で髪を戻すが、一度解れた髪は引っ掛かって一部変に跳ねてしまっている。

「妹がそんなこと気にするんじゃない。俺からさくやと遊ぶ楽しみを奪うつもりか？」

「そんな事は……」

「案内してくれるんだろ？」

「それはしますが、ですが皆さんや父さんもですよ」

「そりやそうだろ」

「二人きりになれないかもしれないよ」

「そういうもんだろ。学園祭って」

「……そういうものですか」

「いいんだよ。こっちは妹が普段どんな所で暮らしてるか見られるなら、それで満足なんだ。催し物だつてしよせんは学生の展示物だぞ？ 最初からそれだけが目当てなら、街中にある普通の店に行つた方がいい。けれど、それでもやっぱり俺たちも、他の生徒の家族も学園祭に行くんだよ。自分達の家族が、どんな場所で過ごしているのか知りたいからな。……大体、お前だつて大学見学する時にデート気分じゃないだろ」

「それは……まあ」

「だから、いいんだ」

「……はい。兄さん」

さくやが俺の肩に軽く頭を乗せる。

ひと目があるの、触れ合つたのはそれだけ。

「これからまた家に帰るんですか？」

「いや、ここまで来ちまったからな。皐月さんの所にも泊めてもらうよ」

「……………」

俺の手にさくやの手が重ねられる。

細い指が手の甲の上を動き、次の瞬間、小さくつねられていた。

「いてっ。何すんだよっ」

「……………今度は冬休みにみんなで行こうと約束してたのに」

「仕方ないだろ、こんな所まで来ちまったんだから」

「夏休み終わって帰る時なんて、あんなに見送ってもらったのに。すぐに行ったら笑われ
ますよ」

「いろはは笑うかもしれないけど、翔子ちゃんは歓迎してくれるから大丈夫」

「……………兄さんって本当に天然ですね」

「お前には言われたくない！」

「まあ、いいです」

座った時と同じく軽い動きで立ち上がって、微笑んだ。

「それじゃ帰ります。また明日、待ってますね」

「ああ。楽しみにしてる」

「楽しみに……ですか。わかりました」

駅前のターミナルにバスが入ってくる。

それに乗り込むと、一番後ろの窓際に座って小さく手を振った。

さくやが見えなくなるまで、そこで見送っていた。

バスが通りを抜け走り去る。

入れ違いのように、銀子さんがやってきた。

「それじゃ帰ろうか」

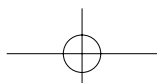
「……ちなみに銀子さんはどこに行ってたんですか？」

「ん？ もちろんさくやちゃんの所。こうちゃんがいるよって教えてきた」

「……なるほど、さくやも大変だ」

「え、なんで？」

「銀子さんはほら超美人ですから。帰ったらモデルや芸能人と知り合いなのかと、さくやは問い詰められると思いますよ」



「ええ。そうかなあ。やっぱり？」

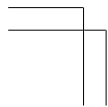
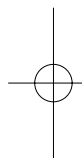
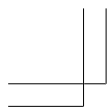
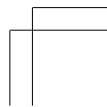
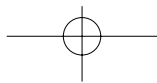
「嘘です」

「ええっ！」

「半分だけですけどね。……とりあえず帰りますか」
急行に乗って御奈神村に。

そしてまた明日やってくる。

それが楽しみだった。



翌日、さくやは一つ決心を固めていた。

「今日の衣装の事なんですけど……」

言いながら顔が熱くなるのを感じる。

自分からそんな事を言い出すにしても、恥ずかしくて仕方ない。

「私は……ええと……」

「さくつち真っ赤でかわいいっ」

「や、薬師さん、やめてください」

一度深呼吸して言い直した。

「あの服、着てみようと思います」

「まったく、孝介はな……さくやの事になると後先考えないな」

御奈神村の駅で合流した親父の呆れ声に、返す言葉がなかった。

「まあまあ誠二くん。いきなりそんな事言ったら可哀想だよ」

「……はあ」

銀子さん曰く、結婚前に何度か会った事があるらしいが、親父はやはり困惑している。昔云った事があるうとも、いきなり目の前の自分より年下の女性に馴れ馴れしくされてはびつくりする。

俺もやられたから良くわかる。

「おにいちゃんは、さくやちゃんの学校って行った事あるの？」

「んー。昔一度だけ。その時も学園祭だったけど、結局さくやと会えなかったんだよな」

「ふん」

「翔子ちゃんも学園祭やる時は呼んでくれよな」

「うんっ」

皆で電車に乗って清宮女子学園を目指す。

校門でパンフレットを受け取り、学園の敷地の中に。

グラウンドには屋台が並び、中庭には大きな立て板が置かれ、学園全体の見取り図になっっている。

あたりにはコスプレをした生徒が自分達の教室の案内を書いたチラシを配っていた。

来場者は思ったよりも多く、中には関係者ではなく学園祭に立ち寄ったらしき客の姿も多く見られた。

「すーいねー」

「そうだな……」

当然の事ながら学園の関係者は全てが女生徒で、それが華やかさに一層の拍車をかけている。

遠くに居るメイドつばい服の子は、何人かの人に写真撮影をお願いされているようだった。

そういった光景も華やかさを増す要因になっている。

「さくやの教室は……っ……っ」

パンフレットを見ながら案内図を確かめていく。

ひとまずそちらに顔を出して、後は自由行動。

大人数でうろついても、落ち着くところがなくて困ってしまうだろうから、各自でバラにしようと決めていた。

「えっ」

「あれ？」

いろはと翔子ちゃんが、何かに驚いている。

「すみません」

横から、メイド服の女の子に声を掛けられた。

手元にチラシが差し出される。

近くに居たメイドさんなら、先ほど注目を浴びていた子だろう。

「もしかして……」

「さくやちゃんっ？」

完全に思考が停止していた。

驚きに固まっていた俺よりはやく、いろはが歓声をあげる。

「うわー。すごいねー。あんまり似合いすぎて一瞬わかんなかったよー」

「そ、そう……でしようか……。ちよつと恥ずかしくて……消えてしまいです」

「すっごくかわいいよ」

「あ、ありがとうございます。翔子ちゃんもとても可愛いです……」

赤くなつたさくやは両手にチラシを抱きしめて、もじもじと身を捻る。

その姿がますます無駄な色気を振りまいているのだが、本人は当然のように気付いていない。

「ほら、孝介」

親父に背中を押された。

「あー……その、さくや」

「は、はい……なんでしょう」

「親父が写真撮るってさ」

頭を小突かれる。

「いてっ」

「……何を馬鹿な照れ隠しなんてしてるんだ」

「そうは言ってもなあ。どうせ撮るんだろ」

「もちろん。そして母さんの墓前に供えておく」

「い、いやです！ やめてください」

「あら……だけど、姉さんなら喜びそうね」

「さやちゃんなら絶対に、ね」

「いろんな意味でやめてくださいっ」

「それはともかくとして、だ」

改めてさくやに向き直った。

「良かったら学園を案内してくれますか？ メイドさん」

言われたさくやはしばしきよんとんとして、深々と頭を下げて、丁寧な挨拶を返した。

「かしこまりました」

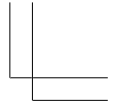
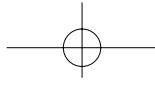
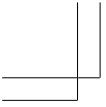
やがて恥ずかしさに赤くそまった顔をあげ、悪戯っぽく微笑む。
「こういうのも少し面白いですね。母さんが人を笑顔にさせていた気持ちさが、少し分かった気がします」

10月の空は、高く澄んだ秋晴れが広がっている。
遠くからさくやと同じ格好をした女の子がやってくる。
交代の時間らしい。

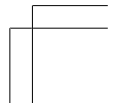
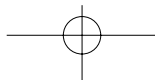
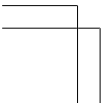
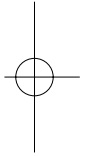
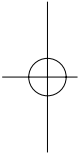
俺たちに小さく会釈をして、さくやに何か耳打ちをしていた。

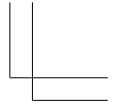
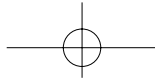
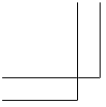
「え、ええ……そうです。私の……大事な家族です」

友人に言うさくやの笑顔は、やはり恥ずかしそうで。
しかし、どこか誇らしげに感じられた。

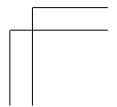
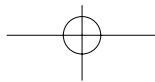
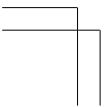
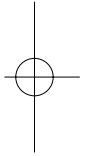
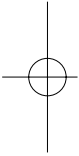


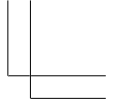
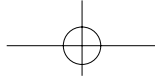
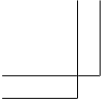
73





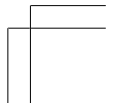
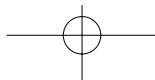
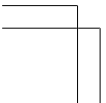
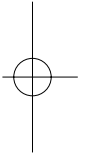
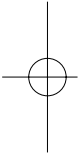
74





75

宵待ちフェスタ！
その後



エピソード

日が傾き、いつしか夕暮れが訪れていた。

グラウンドの中央に設置されたのは、木材で組まれた櫓だ。

その中には今日一日使われた学園祭の飾りが入れられている。

やがて放送と共に、小さな火がつけられた。

小さなマツチから教師が手にした捻った紙に。それから櫓の中に入れられた飾りに。更には教室で使われたベニヤ板へ移り、火はどんどん大きくなる。

元通りになった教室の中、さくやは一人グラウンドの炎を見下ろしていた。

たった一日。

だけど、とても長い一日だった。

家族と共に学園を見て回り、案内をした。

それぞれの教室で行われていた催し物をやって、翔子と金魚掬いで勝負した。

……一匹も取れずに負けてしまった兄には笑われたが、それはとても楽しい時間だった。

た。

女子しかいないこの学園では、最後の炎はあくまで見送るためのもの。

共学だと男女混合でダンスをやったりするらしいが、そのような風習が無くてよかったと思った。

「飲む？」

「ありがとうございます」

どこから調達してきたのだろう。

フルーツ牛乳のパックを清香から受け取る。

ストローを挿して、中のドリンクを吸い上げると口の中に甘みが広がった。

喉を滑り落ち、胃の中に広がる甘さに知らずに入っていた肩の力が抜け落ちる。

「あ、美味しい」

「でしょ」

口数少なく、一人で炎を見送っていた。

「この3年、色んな事があったよね」

「そうですか？」

「わたしにとってはね。さくやにとってはそうでもなかったのかな？」

「……どうなんでしょう。実は少々実感がなくて……」

「色々な事——と言われて、さくやが真っ先に思い出すのは御奈神村で起こった出来事だ。」

そこで生まれ、母を亡くし、死を求めた所を兄たちに救われた。

昨年は山童という動物に追われて命の危機を感じ、兄と恋人になった。

そして今年、日本中でニュースになった大事件を経て今こうしてここにいる。

とても一般的な学生の経験とは言えない。

学園で起こる出来事は、どれもそれなりに日常に食い込んでいて大事ではあったが、困難と思える物があっても、内心で先に思い出すのは暗闇の森の中で感じた恐怖であったり、手を引く張ってくれた力強さだった。

「それでも、楽しかったと思ってます。最初は気まぐれだったんですが、ここに来て良かった」

「そっかあ。それはよかった」

「……？ どうしてです？」

「最初に話した時の事、覚えてる？」

「ええと……」

昔の事を思い出す。

たかだか2年と半分でしかないのに、それはずいぶん遠く感じられた。

「確か私がこの辺りに座っていて、斜めに薬師さんがいて……」

「そうそう。それで初日に声をかけた」

「なんて言われたんですっけ？」

「なんだ。覚えてないの？」

「申し訳ありません……」

あの時は……自宅から遠く離れた所に入学し、寮生になって見知らぬ人と共同生活を
する事になった不安。

それから今まで自分が知らなかった新しい世界への期待。

そして、軽い後悔と喪失感があった。

「卒業式」

「……え？」

「入学式が終わった後に、こうだったの。卒業式終わったみたいなの顔してるよって」
「……………」

そうだったのだろうか？ さくやは自問する。

自分の事に手一杯で、細かいことは思い出せない。

それでも初日に悪い印象が無かったのだから、その言葉は自分にとって嫌なものではなかったのだろう。

「卒業式……………」

そう、あれはさくやにとって、確かに卒業式だった。

幼い頃に母を亡くし、自分は守ってくれる兄という存在に依存をしかけていた。

これではダメだと思ひ遠く離れた学園を選び来てみたものの、喪失感は拭いきれなかった。

『なんか卒業式が終わったって顔してるね』

ふと、耳に声がよみがえる。

——そう、あの時確かにそういわれた。

『すつきりした顔っていうか、ちよつとホツとした顔みたいな。普通逆なのにね』

「……ああ、確かに。思い出しました」

「いやー。帰ってから変なこと言ったかかなあつて自分でも後悔してたんだけどね。でも、みんな入学式終わって、知らない人の中で不安そうな顔してるか、知ってる人だけで固まってるのに、さくやだけだよ。安心したように澄ましてたの」

「別に澄ましていた訳ではないのですが」

「わたしにはそう見えたの!」

「……まあ、不本意ながら、たまにそのような事は言われますけど」

「最初は付き合ひ辛い人なのかなって思ってたんだよ。言葉もそっけなかったし」

「……これが普通なのですが……」

「今はもう分かっているって。でも入学式の後にはちよつと面白い人なのかなって思った。さくや、今の卒業式発言になんて返事したか覚えてる?」

「申し訳ありません。さっぱり」

「だと思った」

「……………むむ」

自分はなんと応えたのだろうか。

ここまで言われるくらいだから、きつと変な回答をしたのだろう。

さくや本人としては、出来れば一言で切り返せるような上手い事を言ったはずなのだが、他人と自分の認識はズいぶん違うらしい。

「すみません。思い出せません」

「しよーがないなー。じゃあヒント、卒業式についてくるもの」

「……………ええと……………」

頑張つて記憶を掘り起こしてみる。

すぐに思い出せないという事は、他人がみるよりもズいぶん緊張していたのだろう。

でもそれは当然だ。

今までずっと共にあった、半身の居ない世界に来たのだから。

卒業というのはいえて妙だ。

さくやにとつて、家を離れてひとり立ちした学園への入学式は、まさしく卒業式に相応しい。

今こうして改めて自らに向き合うのに必要な、大切な時間だった。

「卒業式証書……？」

「正解」

卒業式に必要な物という事で連想したのだが、どうやら間違っていないかったらしい。

「卒業式が終わったみたいっていったら、自分の鞆をあげて、中をみて『卒業証書がありませんよ』って言ったの」

「……いえ、だって無いじゃないですか。入学式なんですから」

「だから、無いなんて分かっているのにやったのが面白かったんだって」

「聞きながら、それはとても上手い切り替えしだと感心してたんですが……」

「違うから！ ずれてるからっ」

だが、得られる物なら欲しかっただろうと思う。

兄を意識したのはずいぶん昔だが、対等になろうと思えるようになったのが学園生活のおかげだ。

きつと、離れた経験がなければ、今も自分はただの『妹』のままだっただろう。

「とまあ、そんなこんなで、わたしはさくやのおかげで楽しかったな。皆神大明神様の
ご威光には何度も救われました」

「……受験には威光が届きませんから、自分で頑張らないとダメですよ」
「はーっ！」

大仰に頭を下げる。

「それじゃ、そろそろ帰るね。さくやはどうする？」

「私は……もう少し見て行こうと思います」

「そっか。それじゃね」

教室を出て行く清香を見送って、携帯を開いた。

少し小さくなった炎を写し、兄に転送した。

ややあってメールが返って来る。

それには一枚の写真が添付されていた。

『学園祭で出会った美少女メイドだ。羨ましいだろう』

そこにはメイド服を着た自分と兄が並んでいた。

見る影もなく赤く染まり、手にしたチラシで顔の半分を隠している。カメラから逃れようとして、視線が定まっていけない。今にも湯気を出して倒れそう。

自分で見た事のない自分の顔だ。恥ずかしさより先に珍しさがあった。こんな顔をしていたのかと苦笑しながら、返事を書いた。

『このような美人を捕まえるなんて、兄さんほとんど女たらしですね。私は浮気は許しませんよ』

返信は速かった。

『メイドも聞き出せなかったんだ。許してくれ』

「まったくもう……」

まあ、気が向いたらもう一度くらいは見せてあげても良いかもしれない。
清宮女子学園の祭りは今回が最後だが、春の受験が終わればまた新しい生活が幕をあげ
る。

そこは兄が通っている大学。

今度は二人で肩を並べて共に通う。

その時にも、きつとまた祭りはあるだろう。

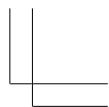
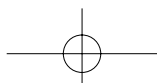
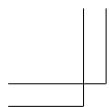
いつか訪れるその時を待ちながら、さくやはもう一度メールを送った。

『きつとまた会えますよ』

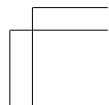
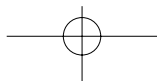
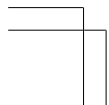
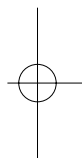
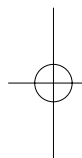
返事は速く、そして予想通りだった。

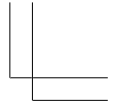
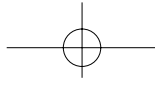
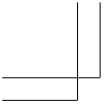
『楽しみにしている』

さて、これをネタにえつちな事を要求されないといいけれど……。
その時はなんと行ってからかってあげよう？

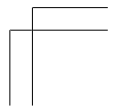
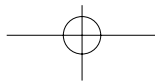
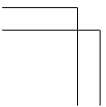
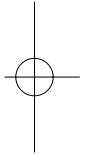
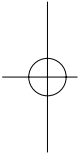


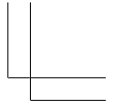
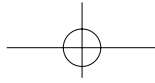
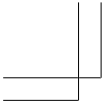
向こうも予想しているだろうから、きっと忘れた頃に言い出すに違いない。
近い未来に訪れるであろう、小さなやり取りが楽しみだった。





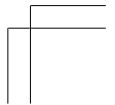
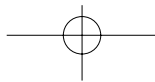
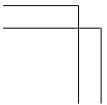
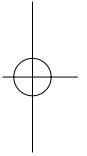
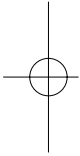
88





89

あとがき



こんにちは。桐月です。

今回は黄昏のシンセミア文庫本「宵待ちフェスタ！」をお送りします。

最近の本が「見上げた空におちていく」「コンチエルトノート」「黄昏のシンセミア」の中から、中編十短編という構成だったの中で、久々の単独ゲームの中編一本になります。

さて、今回の2011年夏コミ前に、あつぷりけ様より新作が発表になりました。

上記の3本の合同ファンディスク「黄昏の先にのぼる明日」です。

こちらのファンディスクですが、内容は全て書き下ろしを予定しています。同人誌の内容の採録などはありませんのでご安心下さい。

自分のサークルで自分で書いたゲームの創作という、二次創作と呼ぶには元に近く、公式ではないために一次創作とも呼べない、1.5次創作というような作品を出しています。

こちらはあくまで、公式では出来ない題材やシチュエーション等を行う事を前提にしているため、今回のようにさくやの学園を出す事は、文字媒体ならではの特権だと思っ

ます。

ただ、こちらはあくまで公式からこぼれた題材であり、本編に組み込まれる事の無いこぼれ話です。

しかし、ファンディスクの内容となると変わってきます。

あくまで公式がゲームとして発売し、本編に内容を補足、あるいは世界観を広げる物として認識されます。

ゲームでファンディスクを作るのは今回が初めてなのですが、自分達が作り上げ、今までプレイしてくれたユーザーを裏切らないような物にしたいと思っています。

これを書いてる現在では公式HPが出来たばかりなので、まだまだ情報が出揃っていないため、不安視されてる声も聞こえます。

ファンディスクという媒体そのものが、ファンから不安視されるという現状、これを完全に払拭するのは難しいかもしれませんが、本編と同じくか、それ以上に意気込みをぶつける事で、頑張りたいと思います。

次に現在の近況ですが、以前告知していた別の会社のゲームも現在作業をしています。

こちらは今年頭の震災の事もあり、自分が大幅に遅れてしまっている方にご迷惑をおかけしてしまいました。

素材やCGが出てくるたびに、作っている自分も楽しみになってくる作品です。長らく開発をしている感じがありますが、それに負けない中身になっていると思います。

こちらにも楽しみにしててください。

さて、最後に今年3月11日に起こった、東日本大震災について。実家は茨城だったので、つくば市だったので直接の被災を免れました。

ただ、大きな地震とその後の度重なる余震により、実家がガタつき、余震が収まるまで大掛かりな修復も難しいようです。

放射能の件では、祖父、祖母が住んでいた土地も被害を被ったらしく、親戚は福島から茨城に避難して、今も帰れない状況になっています。

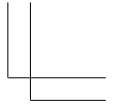
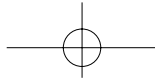
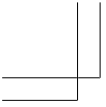
親族以外のところでは、学生時代の友人が一人連絡が付かなくなっています。このような事は自分だけではなく、今この国で何万もの人が味わっています。

被災された方に御見舞いを申し上げると共に、一刻も早い復興を祈っています。

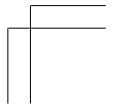
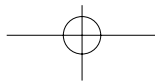
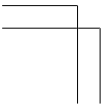
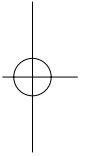
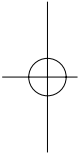
2011 夏
桐月

後書き2

本書を作るにあたり、今回も多くの方にご協力いただきました。
美しい表紙を描いてくださったバハムーチヨさん。
いつも販売を手伝ってくれるショウさん、亮太さん。
それから毎回印刷を下さっているパワープリント様。
最後に、自分の作品を手にとって下さった皆様にお礼を申し上げます。



95



宵待ちフェスタ！

2011年8月14日 初版発行

発行者：桐月

発行元：桐文堂

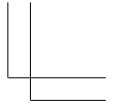
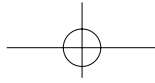
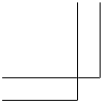
URL：

<http://kifumido.sakura.ne.jp/kiduki/>

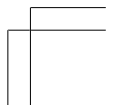
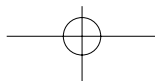
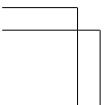
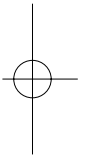
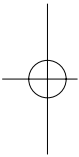
アドレス：kidukirey@hotmail.com

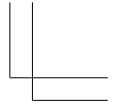
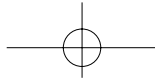
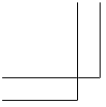
印刷：パワープリント様

本書の内容の無断転載、使用はご遠慮下さい。



97





98

